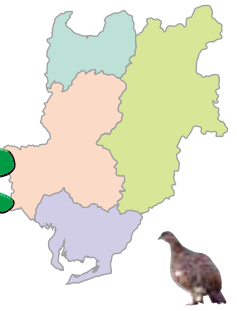




国民の森林・国有林

広報

# 中部の森林



中部森林管理局

〒380-8575 長野市大字栗田715-5

☎050-3160-6513

<http://rinya.maff.go.jp/chubu/>



長野県植樹祭で植樹を行う参加者(長野県諏訪郡富士見町)

## 各地で緑化行事が開催される

～豊かな緑を後世に引き継ごう～

主な項目	○ 「エコeco QKハウス」実演会を開催 .....	P2
	○ 各地からのたより .....	P3
	○ 寄稿「森林鉄道との出会い」「鬼淵鉄橋」 .....	P8
	○ シリーズ「森林官からの便り」 .....	P9
	○ シリーズ「ご当地自慢」 .....	P10



# 「エコeco QKハウス」 実演会を開催

「名古屋事務所」五月十五日、飛騨・世界生活文化センター(岐阜県高山市千鳥町)において、中部森林管理局名古屋事務所と一般社団法人名古屋林業土木協会が「木づかい」運動の一環として開発した、間伐材利用の「エコeco QK(きゅーけい)ハウス」の組立作業の実演会を開催しました。

この実演会は、一般社団法人名古屋林業土木協会主催の「平成二十六年 林業土木技術講習会」の一環として行われ、治山・土木事業等の関係者、近隣の森林管理署の造林・治山事業等担当職員、報道関係者等約一六〇名が見守る中での実演となりました。



組み立ての実演中

実演は丸山製作所(岐阜県中津川市)により行われ約一時間で完成しました。「エコeco QKハウス」は、岐阜県地域材利用開発プロジェクト支援加速化事業の補助も受けて開発したものであり半割丸太加工した間伐材を使用する工法を取り入れ、組み立て時間が短く、運搬も容易な設計になっています。



完成したハウスを見学する皆さん

また、ドアや窓の設置箇所等も、自由に変更可能な仕様となっているため、現場事務所・休憩所だけでなく、物置、臨時のイベントブースなど、「使う側のニーズ」により、多様な用途に対応が可能です。見学者は、ハウスを活用したシーンを想像しながら興味津々に組立作業を見学していました。こうした取り組みを積極的に実施することにより、さら

に木材利用推進の弾みになればと期待しています。



エコeco QKハウス全景

木材の安定的・効率的な供給を目指し!

## 第回 中部地区 広域原木流通協議会を開催

「名古屋事務所」五月二十二日、TKP名古屋ビジネスセンターにおいて、第一回中部地区広域原木流通協議会(事務局 榎東海木材相互市場 代表取締役社長 鈴木和雄)が開催されました。

同協議会は、林野庁が国産材の安定的・効率的な供給体制の構築を図るため、平成二十五年に広域流通体制確立対策事業の実施主体として公募により選定された、(一財)日本木材総合情報センター(代表)、全国素材生産協同組合連

合会、全国森林組合連合会、(一社)全日本木材市場連盟の四者が、全国を八ブロックに分けて開催するとされていたものです。

協議会には、鹿児島大学農学部 遠藤日雄教授、林材ジャーナリスト 赤堀楠雄氏などの学識経験者をはじめ、林野庁、中部局名古屋事務所、県(長野・静岡・岐阜・愛知・新潟・富山・石川・福井県の八県)、各県の森林組合、林産・素材生産事業者・市場関係者、マスコミ各社等約六十余名が参加しました。

はじめに林野庁木材産業課飛山課長や情報センター代表などから趣旨や取組方向等について説明があり、その後、遠藤教授から、多様な樹種並びに大規模消費施設が集中する中部圏の木材流通形態は全国の指標になり得るとする基調講演が



挨拶を行う林野庁木材産業課 飛山課長



あり、局や各県から情勢報告等が行われました。協議会では、主に原木市況・需給見通しに関する情報の共有化をはじめ、原木の広域流通の問題点や課題、民有林と国有林との連携等を検討することとしていきます。また、原木の安定的・効率的な供給体制を構築することを目的に①木材需給情報交換会の定期的な開催、②原木安定供給研修の開催、③策定する広域流通構想の検討、承認と達成に向けた取り組み、④木材需給・価格情報の収集及び提供、⑤その他、協議会の目的を達成するために必要な活動等を行うこととしています。

## 各地からのたより

### 「ふるさとの森づくり県民の集い」長野県植樹祭

〔南信署〕六月七日、諏訪郡富士見町「富士見パノラマリゾート」にて、長野県、中部森林管理局、富士見町などが主催する「平成二六年度ふるさとの森づくり県民の集い（第六五回長野県植樹祭）」が、「つなげよう命の森を未来まで」を大会テーマに盛大に開催されました。

当日は、朝から雨模様で心配されましたが、開会式が始まるころには天候も回復し、地元富士見小みどりの少年団をはじめ、関係機関、林業関係者や多くの協賛企業等およそ一、四〇〇名が、コナラ

やシラカバなどの広葉樹約六千本の植樹を行いました。

作業前の式典では、皇居で採取されたエノキの種一〇〇粒をポットに蒔きました。この種は、長野県林業総合センターで育苗され、二〇一六年に長野県で開催される全国植樹祭において、翌年全国植樹祭が開催される富山県に引き継がれ、関係各県の連携により二〇一八年に福島県の海岸林復旧に役立てる予定となっています。



挨拶を行う奥田局長

会場内では、二〇店ものブースが並び、ジビエ料理（鹿肉串焼き）や豚汁、筍汁が参加者に提供され、好評を得ていました。特に豚の丸焼きには長蛇の列ができていました

南信署のブースでは、ニホンジカ食害

対策の取り組みや治山事業を紹介するパネル、職員が制作した木工クラフトを展示し、植樹作業を終えた参加者や一般のお客さんも興味深そうに見入っていました。

また、植樹祭後、「信州山の日」（七月第四日曜日）に向けたカウントダウンイベントが、植樹会場からゴンドラで一〇



南信署のブースの様子



カウントダウンイベントの様子

分上った山頂駅レストランで開催されました。会場には、約八〇名が参加し、第一部のセレモニーでは知事等による「信州山の日」アピール宣言が行われ、林業を題材にした映画「WOOD JOB! ～神去なあな日常～」の矢口史靖監督が特別ゲストとして登場、山が持つ資源の情報発信の仕方を提案されていました。第二部の県政タウンミーティングは、阿部知事や学識経験者、山岳、林業関係者による意見交換が行われ、信州の山の魅力をアピールしていました。



植樹祭参加者（後列右側が奥田局長）

### 愛知県植樹祭

「名古屋事務所」 「緑から心のやすらぎプレゼント」をテーマに、愛知県植樹祭が五月十七日、市制二十周年を迎えた日





植樹祭式典の様子

また、萩野日進市長は「日進市は大都市名古屋のベッドタウンとして発展しつづけており毎年千人ほどの子供が誕生している。緑（自然）豊かな里山も多くこれらの環境を維持し次世代の子供たちに継承していこう。」と呼びかけました。

緑化コンクール入賞校や緑化功労者等々の表彰式の後、最後に竹の山小学校と日進北中学校の児童生徒代表が「緑を育てる活動の輪をさらに大きく発展させ、将来に引き継いでいきます。」と緑

進市において、昨年開校した市立竹の山小学校・日進北中学校を会場にして盛大に開催されました。式典で大村知事から「緑化意識を高め更に緑の輪が広がることを期待します。」とあいさつがありました。



植樹を終えた山元次長（左から2人目）と関係者の皆さん

の誓いを宣言しました。式典セレモニー終了後は、校舎前においてキンモクセイやウメなど八種類、六百三十本の広葉樹を記念植樹しました。

### 第二十四回

### 「つけち森林の市」開催

【東濃署】五月三日～五日までの三日間にわたり中津川市付知町にある「道の駅花街道付知」において「つけち森林の市」が開催され、東濃署も参加しました。

このイベントは森林や木の文化のPRを目的に地元の商工会や製材・木工業者などが参加する行事として毎年開催されています。期間中は、多くの家族連れや木材業者が訪れ、製材・木工品の販売をはじめ、東濃ヒノキの家屋建前実演・即売、木の器作品コンテスト、木製ベンチを日本一の長さにつなぐ「ツナベンチイベント」等を楽しみ、大変にぎやかなイベントとなりました。

東濃署のブースでは、木曾ヒノキ備林や治山事業などのパネルを展示し、国有林の役割を紹介しました。



鉛筆立てを作る子供たち

また、子供たちには、署員が手ほどきしてヒノキの丸太をのこぎりで伐り鉛筆立てを作る体験をしました。

さらに、中津川市役所のブースでは、昭和三十年代の明治神宮復興造営に、この地域の国有林から伐出された多くの木曾ヒノキが役立てられたことを紹介する写真パネルが展示され、来訪者が足を止め見入っていました。（このパネルは今年三月に、中部森林管理局が同市に贈呈したものです。）

今回の「つけち森林の市」には約二万人の来訪者があり、多くの方々に森林や木の文化に親しんでいただき、森林管理



写真パネルを熱心に見る来訪者

署や国有林について知っていただく良い機会となりました。

### 林業と木曾の森林を学ぶ

【木曾署】五月九日、長野県上松技術専門校訓練生四二名が小川入国有林において、熊の皮剥ぎ被害防止テープ巻き作業の林業体験を行いました。

この林業体験は本年三月に上松技術専門校、木曾官材市売協同組合及び当署の三者で締結した「職業訓練のための木曾産木材の供給と利用等に関する協定書」に基づくものです。

当日は、当署と木曾森林ふれあい推進センターが指導にあたり、「皮を剥がされた立木は成長できないし、良質な材に



もならない、今まで育てた苦勞が報われなくなってしまう。」等の説明と森林技術員による作業の実演の後、訓練生が作業に入りました。

当初、訓練生は慣れない手つきで立木にビニールテープを巻いていましたが、職員のアドバイスを受けながらコツをつかみ、午前中に予定した箇所での作業を終了することができました。



熊の皮剥ぎ被害防止テープを巻く様子

午後は、赤沢自然休養林内の学術研究コースを散策し、職員の解説により、木曾ヒノキ林の成立過程や木曾の歴史などを学びました。

訓練生からは「急斜面での作業で疲れた。」「定期的な手入れと獣害の予防対策の大事さが理解できた。」「木曾の山に多くの人が関わってきたことや、厳しい気

候で育っているから、緻密な木材となることがわかった。」等感想を語っていました。



木曾署職員から説明を受ける訓練生

今後も、上松技術専門校では、三者協定に基づき、製材工場を見学し製材品の作成過程等も学びながら技術の研鑽に役立てることとしています。

当署としては、引き続き国有林のフィールドを活用した人材育成に貢献したいと考えています。

### 地元高校生が治山工事現場を

#### 見学・実習

【東濃署】五月九日、岐阜県立恵那農業高等学校環境科学科の三年生三九名が東濃署管内の国有林で、治山工事現場の見学・実習を行いました。

これは、地域の未来を担う高校生に、

日頃は目にする機会の少ない森林土木に対する理解を深めてもらおうと、今年度から新たに始めた取り組みです。

当日は、はじめに教室で、森林管理署の業務や治山工事について説明を受けた後、湯舟沢国有林（中津川市）の工事現場に移動しました。



姥ナギ沢を見学する高校生

恵那山の稜線に近い崩壊地で行われている姥ナギ沢復旧治山工事の現場では、斜面にワイヤーで吊された重機（ロッククライミングマシン）を使った山腹工事について説明を聞き、安全帯を装着しての法面降下を体験しました。生徒からは、「急斜面で思わず足がすくんだ。いかに危険な場所か治山工事をしているのがわかった。」「ロープを使って、山の斜面を降りていく作業は、簡単そうに見えるけど、実際に安全帯をつけてみると大変でした。」「復旧工事とは具体的に何を

するのか、どのような効果があるのか、ということがよくわかりました。」等の声が多く聞かれました。



安全帯を装着して現場体験

午後は、市街地近くのコハ清水復旧治山工事の現場で、溪間工・護岸工・山腹工の多様な工法を見学し、テストハンマーを使ったコンクリート強度推定試験の実習を行いました。「テストハンマーでコンクリートの強度を測れるなんて凄い。パネが内蔵されており、思った以上に力を使うことに驚きました。」との感想がありました。

また、今回ご協力いただいた工事請負事業体で働く同校卒業生の颯爽とした姿に触れ、話を聞くことができたことも生徒達にとって良い刺激となったようでした。

厳しい条件の下で行われている治山工事を目の当たりにして、「森林管理署の



仕事は、麓に住む私達の安全と深い関わりがあった。「人々のために危険な場所で作業している人は、ほんとに格好良く見えて自分も少しやってみたいと感じました。」「私も、見えないところでも人の役に立てる仕事をしたと思います。」といった感想も聞かれました。

当署としては、これからも高校生の森林土木に関する興味と関心を高め理解を深めることができるよう、治山工事の現場を見ていただく取り組みを重ねていくことにしています。

### 「利賀飛翔の会」へ贈呈

〔富山署〕五月十六日、富山森林管理署において国民の森林づくり推進功労者への林野庁長官感謝状の伝達式が行われました。

富山署管内では、砺波市利賀村を拠点として活動するNPO法人「利賀飛翔の会」が選ばれました。

同会は、平成九年に設立され、水無国森林の水無湿性植物群落保護林において、湿性植物を守るための湿原保全に取り組むとともに、地域の里山登山道整備、自然観察、散策ガイドを行い、地域に根ざした森林環境保護に貢献された功労に対して感謝状が贈呈されたものです。

加藤署長から同会に感謝状が贈られた後、「富山県西部地区の国有林で湿性植

物を保護するための取組などが認められたものであり、これまでの同会の活動に改めて感謝します。引き続き、地域と連携した森林づくりにご活躍いただきますようお願いいたします。」と式辞が述べられました。



加藤署長(右)から感謝状を贈呈

利賀飛翔の会の中西理事長からは「これまでの活動が評価され表彰をいただきました。地域、国有林と連携して今後も森林づくりにがんばっていきます。」と受賞の挨拶がありました。

富山署は、これからも地域と連携した森林づくりを推進していきたいと考えています。

### ヒノキコンテナ苗見学会を開催

〔岐阜署／森林技術・支援センター〕四月二十三日、岐阜署管内の高天良国有林において「ヒノキコンテナ苗見学会」を

開催したところ県内の地方公共団体や林業団体等約三〇名の参加がありました。コンテナ苗は、植付作業の省力化により、コスト縮減が図れるとして近年、全国的にその取り組みが進められています。が、スギを導入した事例が多く、当地域の主要樹種であるヒノキの事例が少ない状況にあります。

はじめにコンテナ苗の特徴や国有林での導入状況、岐阜県の試験研究の状況等を説明し、その後、コンテナ苗用に開発された様々な植付器具を使って植付作業を体験していただき、参加者からは「植えやすい。」「扱いが容易だ。」「植付器具の違いがよくわかった。」等の感想がありました。



説明を受ける参加者

今後は、見学会を開催した高天良国有



植付器具を使用しての植付作業

林において、岐阜県森林研究所と共同で実証試験に着手し、林地傾斜や植栽器具ごとの作業効率、育苗履歴・植付時期の違いによる成長状況等の試験研究を行い、地域に適したコンテナ苗の育苗やコンテナ苗を導入した造林技術の普及に取り組んでいくこととしています。

### 〔高国〕木曽ひのき

#### 最高値を更新

〔木曽署〕五月二十三日、木曽官材市売協同組合坂下事務所において原木市が開催され、国有林から委託材として高年齢人工林ヒノキをはじめ人工林サワラ等約五十立法材を出品しました。今回、出品した〔高国〕木曽ひのきの高年齢人工林ヒノキのうち二本は通直で隣接二材面が無節の「極印押印材」で、そのうち一本が



一立法が当たり二七万五千円で落札されブランド化の取り組み以降最高値となりました。



(元口)



最高値となった人工林ヒノキ(末口)

落札されたヒノキは、南木曽支署管内の阿寺国有林から生産された百十六年生の丸太で、長級四、径級四十四センチ、材積〇・七七四立法材です。落札されたのは愛知県の業者で、ここ数年木曽谷の国有林から生産された高齢級人工林ヒノ

キ材を使用し、板・建具等の製作を手掛けており、「木曽産ヒノキの製品は年輪が緻密で色味が良く、節が少なく良質である。」と、お客様からの評判も非常に良いとのことでした。

全体的に需要動向が落ち着き、ヒノキ並材価格が弱含みのなか、良材の品薄感からか、これまでのブランド化に向けた取り組みと木曽産の優良材が高い評価を受けていることを実感することができました。

今後もPR活動等ブランド化の取り組みを継続し、地域・木材関連産業の活性化に貢献していくこととしています。

### ナラ枯れ被害対策に関する取組

【東濃署】五月十七日、恵那市内の国有林「アライダシ自然観察教育林」において、地元の町づくり委員会、NPO、市役所とともにナラ枯れ被害対策に関する取組を行いました。

アライダシ自然観察教育林は、恵那市上矢作町の北東部に位置する一〇鈴の針葉樹と広葉樹が混じった自然林で、自然観察や森林浴を楽しむ場として多くの方々が訪れています。その中でも遊歩道入口にあるミズナラの大木や園内中央の共生木（ミズナラとサワラが癒合し一体となっている）は、教育林のシンボリックな樹木として親しまれています。

しかし、昨年調査したところ、カシノ

ナガキクイムシに幹を穿孔されたミズナラ等が七月八月にかけて集団的に枯死する被害（ナラ枯れ）が教育林でも確認されたため、カシノナガキクイムシが活発化する初夏を前に、ナラ枯れに関する学習と対策を地域の方々と行うことにしました。

当日は、ナラ枯れ研究の第一人者である衣浦晴生氏（独）森林総合研究所関西支所生物被害研究グループ長）を講師に招き、まず、ナラ枯れの被害発生状況や枯死の原因となる菌を媒介するカシノナガキクイムシの生態等について講演をいただきました。新緑が眩しい日差しの中でしたが、総勢一五名の参加者から多くの質問がなされ、予定した一時間を三〇分もオーバーするほどでした。



講演を聴く参加者

講演に続いて、昨年被害にあったと思われる遊歩道入口のミズナラ大木に、樹幹内で羽化したカシノナガキクイムシの飛散を防止するため、「カシナガホイホイ」（粘着シート）を地際から高さ三メートルまで巻き付けました。



ミズナラに粘着シートを巻く作業

さらに被害を受けていない共生木については、予防策として根元にドリルで深さ五センチほどの穴を二〇センチ間隔であけて殺菌剤「ケルスケット」を注入しました。どちらの作業もちよつとしたコツを衣浦講師に教えていただいたおかげで、手際よく作業ができました。

休養林を訪れ、作業風景を目にした市民の方々からは、「大変な作業で森林を守っているんですね、ご苦労様です。」





殺菌剤を注入している様子と参加者の皆さん

と声をかけていただきました。  
また、作業に参加した地元の方々からは、「ナラ枯れ被害対策についてこのような機会を設けていただき大変ありがたい。」と感謝していただきました。これからも、地元と共同して、地域が大切にしている自然林の保全に努めていきたいと考えています。

## 寄稿

かつて木曾ヒノキや天然広葉樹を運材し、地域住民に愛され続けてきた森林鉄道に係る思い出や楽しい出来事などを、OBの皆様から、寄稿いただきます。

た。

国有林の歴史を示す貴重な財産としてここに掲載させていただきます。

## 森林鉄道との出会い

元坂下営林署 宮下 幸彦氏

昭和二十年四月、名古屋より母の故郷の坂下へ疎開してきた紅顔の美少年？（一五才）が、当時の木曾地方帝室林野局坂下出張所田立伐採事業所へ採用となりました。戦争中の為、働き盛りの人達は軍隊に行き、山の中の現場は私達のような幼年か、老年の者が殆どでした。

与えられた仕事は、森林鉄道の作業軌道の保守で、旦那（指導員）に連れられて山の中に敷設されている作業軌道の保守に従事していました。

戦時の特別増産計画で出材が割り当てられた、二台あったガソリン機関車のうち一台は運転手が居なくて休車、この車を動かして目標達成を考えた主任さんが、私に「機関車の運転をしてみないか。」と勧め、私は、機関車の事は何も知らないものの、好奇心丸出しで承諾。専任の運転手さんより動かし方を習ったのでありました。作業軌道は、写真にあるように沢を蛇行しながら上流へ延長されて、集材機による積み込み盤台に至っております。この作業軌道たるや

木材を割った材料で組み立てたものが多く、所どころ土道もありましたが、危険極まりないものでありました。若気の至りか？あまり思いも思わず、空車の引きあげ、材木の積載車を連結しての乗り下げにも従事し、時々脱線事故もありましたが目標達成に努力いたしました。

また、田立森林鉄道一級・二級線中で継駅の奥屋まで材木の積載車を、奥屋からは空車を牽引してくる生活でした。



作業軌道の様子

また、その頃坂下に夜間高校が開設されたので応募し入学、仕事が終わってから約五キロの道を徒歩での通学はだいぶ堪え、一学期を頑張りましたがとうとう尻尾を巻いて退学、今思えばもう少し環境のよいところであれば？

六九年前の青春の一頁でした。

## 鬼淵鉄橋

元長野局森林技術センター 杉本利次氏

森林鉄道の起点に架かる橋、鬼淵鉄橋。

我が家は鬼淵鉄橋の袂であり家の前は、蒸気機関車の車庫や鋳物工場などがある森林鉄道の中心地で、子どもの頃は林鉄と共に生活をしていたようなもので、当時の上松運輸営林署は森林鉄道のレールを除き、森林鉄道に関わる資材の大半は直営で製作していた。

午後の三時頃になると王滝や赤沢の奥から蒸気機関車が、丸太を積んだ台車二〇台ほどを連ね鬼淵鉄橋手前の操作場へ入ってくる勇姿は壮観なもので、上松の町も活気に満ちていたが、今となればあの賑わいは何であったのかと思う。

当初、蒸気機関車の燃料は木曾ヒノキの枝を一五センチ程度に切った木片であった。鉄橋の近くに直営の製材所があり、その二階で生産していた。二階で生産していたのは、木片を蒸気機関車に積むためであった。木材のオガコを捨てる場所で沢山のカブトムシを捕ったことが思い出だ。

いつの日か蒸気機関車の燃料は石炭に変わった。

昔は、トントン葺き（屋根板）の屋根の家が多く、蒸気機関車の煙突から出る火の粉が屋根に点いてボヤ騒ぎになるこ



とも多々あった。

木曾川から鉄橋の最上部まで一〇〇メートルくらいはある。この鉄橋のアーチを酒に酔った勢いで裸足で登った強者が居た。しばらく足跡がアーチに付いていた。

ある時、鬼淵鉄橋修理の光景を見た。橋の袂で焼いたボートを長いハサミで掘んで橋の上に居る作業員を目掛けて投げ、上の人がジョウゴのような物で受けて、リベット打ちする作業であった。赤く熱したボートが橋の上の作業者を目指して正確に飛んでいく様と受け取る技は、さすがプロと子供心に思った。

森林鉄道に関する思い出の一コマを紹介させていただきます。



〔中信署 松本森林事務所〕

中村英昭 首席森林官

松本森林事務所は、長野県の中央部の松本市に位置し、日本百名山的美ヶ原高原を含む一帯と松本盆地の西側の日本百名山の蝶ヶ岳・常念岳を管理しています。

約二、〇〇〇年前後の美ヶ原高原からの眺望は、北には北信五岳・東に浅間連峰、西に北アルプス・御嶽山を一望し、南に八ヶ岳・富士山・中央アルプス・南アルプスを一望できる景観に富んでいるとともに、あの深田久弥にして「その



美ヶ原にある電波塔を望む

高さに、広さを加えるとまさに日本一かもしれない」と、いわしめた広大な溶岩台地が広がっています。

また、日本の中央に位置することから近年は無線の重要な中継地として、頂上付近の王ヶ頭・王ヶ鼻には放送各局の電波塔も設置されています。

もともと、美ヶ原高原は二七〇年前の元禄時代から農閑期の牛馬の休養場として利用されてきましたが、近年、ニホンジカの増殖により、牧場に牛ならぬシカが住み、また夏になると高原を覆い尽くしていた、ヤナギラン・クガイソウ・テガタチドリなどの高山植物も食害を受け、残るのはシカも食べないレンゲツツジの一群のみです。

稀少な高原の植物の回復を期して美ヶ原自然環境保護協議会で、ニホンジカ対策の電気柵の設置を行っています。



ニホンジカ対策の電気柵の設置



牧場内で群れるニホンジカ

中信署においても二十六年度からアツモリソウの保護を目的に電気柵の設置を行うこととしています。

また、高原の植物等保護の呼びかけを六月～一〇月までの期間、高山植物等保護対策協議会（高植協）とグリーン・サポート・スタッフ（GSS）と協力しながら行っています。これから、梅雨

の時期を迎え、急激な天候の変化や雷等に注意して、安全対策を確実に、業務を遂行したいと考えています。



高山植物等の保護の呼びかけ（高植協とGSSの合同で）



◎長野林政協議会・林政連絡会議

7月8日 中部局

◎国有林観光施設協議会総会及び全国レクリエーション協会長野支部総会

7月10日 長野市

◎高山植物等保護対策協議会総会

7月16日 中部局

◎岐阜県・愛知県合同林政連絡会議

7月28日 岐阜市

◎夏休み子どもふれあいデー

7月31日 中部局





諏訪大社は、長野県中央の諏訪湖をはさんで南に上社（本宮・前宮）、北に下社（春宮・秋宮）に分かれ二社四宮が鎮座しています。

全国各地にある諏訪神社の総本社であり、日本最古の神社のひとつとされています。歴史は大変古く、「古事記」にその起源が、「日本書紀」には持統天皇が勅使を派遣した、と記されています。祀られている「お諏訪さま」「諏訪明神」は、古くは風の神、水の神、狩猟・農耕の神、武士の時代には軍神、現在では産業や交通安全、縁結びの神として信仰されています。

七年に一度、寅と申の年に行われる御柱祭で知られています。

◆上社（かみしゃ）  
本宮（ほんみや）（諏訪市）

片拝殿が幣拝殿の左右に並ぶ独特の「諏訪造り」で、建造物も四社中で最も多くを残しています。現在の建物は江戸時代に再建されたもので徳川家康の寄進による四脚門など、国の重要文化財に指



上社本宮

定されている貴重な建造物も多くあります。

◆前宮（まえみや）（茅野市）

諏訪信仰発祥の地と伝えられており、その昔は諏訪大社の祭祀を司る大祝の居館をはじめ、多くの建物によって構成されていました。本殿を取り囲むように建つ四本の御柱がよく見えます。



上社前宮御柱

◆下社（しもしゃ）  
秋宮（あきみや）（下諏訪町）

樹齢八百年の杉の巨木や、御柱の年に新調される神楽殿の大注連縄などが荘厳な雰囲気醸し出しています。春宮と共に

に国の重要文化財に指定される幣拝殿は二重楼門造りと呼ばれています。



（上）下社秋宮神楽殿



（左）下社春宮幣拝殿

◆春宮（はるみや）（下諏訪町）

下馬橋と呼ばれる木造の太鼓橋を眺めながら直進すると、境内に辿り着きます。社殿の奥にそびえる杉の老木がご神木です。正面に神楽殿、その奥に幣拝殿と片拝殿、更に奥には宝殿があります。

◆御柱祭（おんぼしらさい）

「天下の大祭」として全国に知られている諏訪大社最大の神事です。正式名称は「式年造営御柱大祭」といい、宝殿を立て替え、また社殿の四隅に「御柱」と呼ばれるモミの巨木を曳建てる神事で七年に一度、寅と申の年に行われます。上社、下社それぞれに直径約一丈、長さ約一七丈、重さ一〇ト以上にもなる御柱を山から伐り出し、木遣りに合わせて人力のみで曳き、各お宮の四隅に建てます。

四月の「山出し」と五月の「里曳き」があり、山出しでは、巨木の御柱が次々と坂を下る「木落し」や、上社では冷たい水が流れる川を曳き渡る「川越し」があり、その豪



御柱が下る木落し坂

壮な情景は他に類を見ません。里曳きでは、曳行の合間に長持ち、騎馬行列など時代絵巻が繰り広げられます。また、諏訪大社の御柱祭が終わると、諏訪地方の各地区にある小宮の御柱祭が行われ、御柱年の諏訪地方は一年を通じて御柱一色となります。

次回は平成二十八年（申年）

アクセス

- 上社本宮 JR中央本線 上諏訪駅下車 茅野駅下車
- 車 諏訪ICから約3km
- 上社前宮 JR中央本線 茅野駅下車
- 車 諏訪ICから約2km
- 下社春宮 JR中央本線 下諏訪駅下車
- 車 岡谷ICから約5km
- 下社秋宮 JR中央本線 下諏訪駅下車
- 車 岡谷ICから約6km